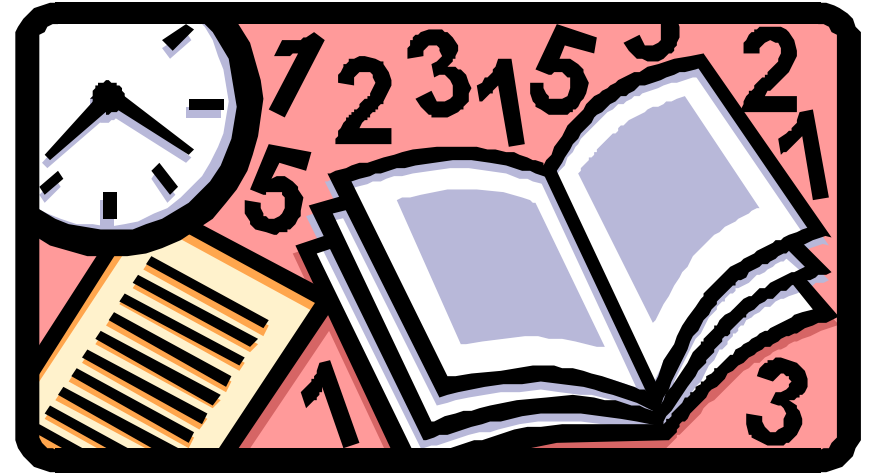


発達障害のある思春期症例の 院内学校や犬介在療法などによる効果



医療法人 耕仁会 札幌太田病院

森但臣 奈良岡妙子 伊藤恵理

市嶋優紀 太田耕平

はじめに

アニマルセラピー

横山氏は、

- ・「思春期への教育的効果」
- ・「犬は子供を批判しない為に、子供が自分自身を受け入れられるようになる」²

当院では、平成23年11月から「太田式犬介在療法」を導入。

『院内学校』

個々の学力に合わせた勉強する機会をつくり、学力の回復や自信の向上などを目的としている。

症例紹介 A男、14歳、病名:自閉症障害(薬剤使用無)

入院歴 当院2回の入院歴あり

家族歴 母・本人の二人家族

既往歴 **三歳時に児童相談所から知的障害・自閉症の傾向を指摘された**

成育歴 小・中学校は特別支援教室に通学

現病歴

・小学校 殆ど登校していた

・中学校 **いじめはなし**。1年時の2学期は二日間のみ登校 **イライラした際に 扇風機・物干し竿を投げる等エスカレートした。**

母の顔や頭を叩いたり、アパート廊下の消火器を持ち出し暴れた

児童相談所に相談 **知的障害者の短期ショートステイ利用(2週間)**

治療・看護の経過

初回入院(入院期間:27日)

- ・入院理由理解できず、母へ暴言があった。
- ・女性患者へ体を触るなどの迷惑もあった。
- ・知的障害のため言語理解が乏しく、注意を促しても同様の行為を繰り返した

多職種カンファレンス

1. 遊び療法を通し、入院治療への不安、抵抗を軽減する
2. 男性職員の父性的指導を通し、規則正しい生活を獲得する
3. 院内学校を通し、学力回復、向上から自信を獲得する

以上、3つの目標を設定

治療・看護の経過

各種プログラム(小弓道・チャンバラ療法など)

- ・積極的に参加し、「楽しかった」と返答
- ・ニコニコと笑顔が見られた

「太田式犬介在療法」(ワンちゃん療法)

初めは、「犬に触るの初めて」と恐がった。



次第に慣れ、積極的に病棟内を散歩


登校支援システム

入院10日～母の送迎により当院から登校開始。学校との連携・協力が得られた。

入院期間27日で退院したが、再度不登校となり、家で暴れた。母からの相談で、退院から約20日目で2回目の入院。

治療・看護の経過

2度目の入院治療(入院期間約3ヶ月)

- ・入院1日目から、母の送りで登校、単独で帰院。帰院後「学校は楽しかった」と感想を述べた。
- ・学校、病院との連携  連絡帳活用し、情報を共有した。
- ・院内での共同生活
親しくしてくれる女性入院者に迷惑行動があり、前回入院時同様、男性職員を中心に父性的な関わりを継続。問題行動が消失し、行動が落ち着いた。

治療・看護の経過

小弓道・チャンバラ療法などのプログラムで、**楽しみつつ、ルールを守って遊ぶことが可能となった(道徳心の芽生え)。**

院内学校では、**医師・看護師・心理士が協力し、座席の位置、指導法などを工夫し、集中していただける時間が増加。**

太田式犬介在療法の導入

自分よりも弱い立場の存在と関わり

- ・犬が受容してくれることへの安心感
- ・頼られるうれしさから、犬のお世話、思いやり

情緒的な安定と成長

犬との直接的触れ合い

- ・「可愛い」、「元気が出る」などの感情表現
- ・精神的ストレスの軽減

迷惑行為が減少(根気強い指導との相乗効果)

母・児童相談所・病院とで相談し、施設への入所が明確になり退院した(入院期間3ヶ月)。

考察

本例では、知的障害・父親が不在家庭のため、父性が欠如などが背景にあった。

厳しい躰を受けた経験が少なかった(精神的未熟)。

自己の要求が満たされない場合、感情や行動をコントロールする対処法を学び、獲得する機会が少なかった。

考察

入院治療により男性職員が愛情ある父性的指導を根気強く継続し、躰を補う機会を得た(規則正しい生活指導の重要性)。

各治療プログラム、院内学校などを通し、褒められることの喜び、学ぶことの楽しさなどから自信を回復した。

考察

太田¹は

「努力、忍耐 辛い 褒められる うれしい。すなわち努力や忍耐する事が褒められなくても好きになり、それが出来る自分に自信が出来、さらに高い目標をもつようになる」と述べている。

A男は、男性職員の父性的な関わりから「努力・忍耐 辛い」を体験した。また、各種プログラムや学習指導での「褒められる」体験から、この一連の流れを会得する契機となった。

考察

「太田式犬介在療法」

愛情や優しさ・自分を頼る存在への慈しみ、命の尊
さなどの学び

「可愛い」など思う事によるストレスからの癒しなど
の要因

以上が症状の改善に有効

考察

横山ら²⁾は

「アニマルセラピーには生理的、心理的、社会的利点が存在する」と述べている(抄録集表1参照)。

リラックス効果や肯定的感情・心理的自立を促す
教育的効果など

上記作用により

他者を思いやるなどの情緒的な成長
それらに伴った行動の改善

参考文献 「アニマルセラピーとは何か」 横山章光(2002 第5刷)

生理的利点

- 1)病気の回復・適応、病気との闘い
- 2)リラックス、血圧やコレステロール値の低下
- 3)神経筋肉組織のリハビリ(特に乗馬療法)

心理的利点

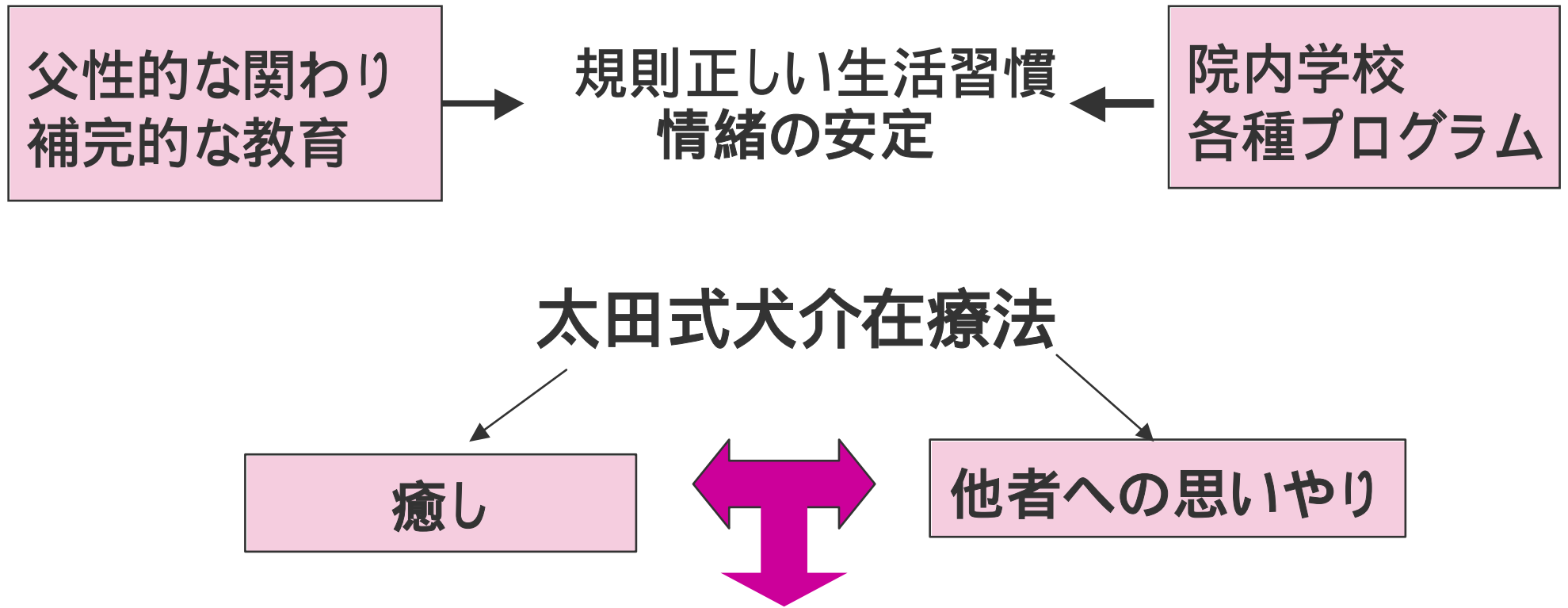
- 1)元気づけ、動機の増加、活動性(多忙)・感覚刺激
- 2)リラックス、くつろぎ作用
- 3)自尊心・有用感・優越感・責任感などの肯定的感情、心理的自立を促す
- 4)達成感(特に乗馬療法)
- 5)ユーモア、遊びを提供する
- 6)親密な感情、無条件の受容、他者に受け入れられている感じの促進
- 7)感情表出(言語的・非言語的)、カタルシス作用
- 8)教育的効果
- 9)注意持続時間の延長、反応までの時間の短縮
- 10)回想作用
- 11)自分との境遇と重ね合わせる

社会的利点

- 1)社会的相互作用、人間関係を結ぶ「触媒効果・社会的潤滑油」
- 2)言語活性化作用(スタッフや仲間との)
- 3)集団のまとまり、協力関係
- 4)身体的、経済的な独立を促進する(盲導犬、聴導犬)
- 5)スタッフへの協力を促す

おわりに

機能不全家庭・発達障害のある症例との関わりから学んだこと



行動の改善と人格的成長

おわりに

思春期症例では、
不登校の背景に家庭での虐待・学校でのいじめなどが多くみられる。

心に傷を負った児童に対して、今後も太田式犬介在療法を看護に採用し、愛情や優しさ、慈愛、癒しを提供していきたい。